

カオダイ・ティエン・ティエン（先天 Tiên Thiên）派 の創設過程

高 津 茂

はじめに

筆者は、これまでカオダイ教の支派についての調査と研究をその成立過程を中心に行ってきた⁽¹⁾。本稿ではその一貫としてティエン・ティエン（先天）カオダイ派について考察することで、タイニン聖座派以外のカオダイ教諸派をも含めたカオダイ教の多様性を明らかにせんとするものである。

また、宗教教団としてのカオダイ教の認可は1926年ではあるが、カオダイの降臨は1920年1月もしくは2月にタン・アン省 (tỉnh Tân An) で、ドアン・ヴァン・キム (Đoàn Văn Kim), レエ・キエン・トォ (Lê Kiến Thọ), グウエン・ヴァン・ヴァン (Nguyễn Văn Văn), チャン・フォン・サック (Trần Phong Sắc) らが機を求め壇を立て、すなわち扶鸞を行った際にカオダイ仙翁 (Cao Đài Tiên Ông) の名が降された最初とされ、その際に法壇 (pháp đàn) の役を担ったのがチャン・フォン・サック、陰童子 (Đông tử âm) がレエ・キエン・トォ、陽童子 (Đông tử dương) がグウエン・ヴァン・ヴァン、典記 (Diễn ký) がドアン・ヴァン・キム、そして読み手 (Độc giả) がゴォ・ヴァン・チュウ (Ngô Văn Chiếu) であった⁽²⁾。この後にゴォ・ヴァン・チュウがカオダイ仙翁の最初の門弟となったことから、現在でもゴォ・ヴァン・チュウを教宗とするカオダイ・ダイ・ダォ・チュウ・ミン・タム・タイン・ヴォ・ヴィ (Cao Đài Đại Đạo Chiêu Minh Tam Thanh Vô Vi) 派がティエ

ン・ザン省 (tỉnh Tiền Giang) カイ・ライ (Cai Lậy) を中心に信仰を集めている。

このことは、カオダイ・ミン・チョン・ダォ聖会の始祖チャン・ダォ・クワンがミン・スウ (Minh Sư) 派の僧侶として人生の過半を過ごしてきた中で、壇に仕えるようにとのゴック・ホアン・トゥオン・デェ (Ngọc Hoàng Thượng Đế) に諭されカオダイに入門した⁽³⁾経緯と併せ考えると、カオダイ教がメコンデルタを中心とした宗教伝統、中でも扶鸞という降霊術の伝統の中にあることを窺わせる⁽⁴⁾。

本稿の考察対象となる先天カオダイは、中国に淵源を持つ先天道との類縁をうかがわせ、游子安も「カオダイ教とベトナムにおける早期の先天道伝播との関係も今後検討してゆく必要がある。とくにカオダイ教の内部にある諸派の一つに「先天派 (Tiên Thiên)」があることは注目に値する。」と指摘している⁽⁵⁾。しかし、指摘にとどまり、カオダイ先天派の形成過程に関する具体的な研究を十分に踏まえたものではない。

メコンデルタは17世紀末から福建・潮州・広東などの明末遺臣を中心とした華人が大量に進出し、ミィ・トォ、カン・トォ、ハ・ティエンなどの華人都市が生まれた⁽⁶⁾。明末清初以来の中国民衆宗教の影響がメコンデルタの移民社会にも少なからずあったであろうことは想像に難くない。19世紀のヴェト人の屯田や入植後にも、同世紀末のナム・キにおける1862-1888年間でヴェト人が1,629,224名であるのに比し華人は

56,000名、クメール人は151,367名おり、1895年でヴェトナム人が1,967,000名であるのに比し華人は88,000名、クメール人は170,488名であった⁽⁷⁾。19世紀末における華人の急速な増加率に着目するなら、運河建設と水田開発の過程での中国移民の持ち込んだ宗教文化がヴェトナム人の宗教文化と混淆してメコンデルタの宗教文化を形成したとって過言でないと思う。

本稿が扱う先天カオダイ派の考察が、カオダイ教支派の研究のみならず、わずかなりとも近代東アジアに通じる民衆宗教の流れの中におけるメコンデルタの宗教風土の理解に貢献できれば幸いである。

1. 中国民間信仰の中での先天道とカオダイ教の中での「先天 (Tiên Thiên)」の理解

遊子安によれば、「先天道は清代初期、江西出身の黄徳輝によって開かれたもので、清代の公文書には「青蓮教」「金丹道」と称された。初期先天道は主に江西省、四川省などにおいて活動していたが、道光癸卯(1843)から咸豊年間(1851~1861年)に湖北省を経て広東省に伝来した。清末民初には全国的に広まった上、東南アジア地区にも伝播し、先天道が創設した道堂、齋堂は二〇世紀前半には顕著な拡大傾向を見せた。」とある。さらに、「先天道は人の本性は善良であるとし、〔人は〕みな瑤池金母が世に落とした九六億の根本の種子であったが、世に降って人となると種々の欲望に欺かれ、元来の本性が惑わされ、もともと持っていた根本にあるものを失ってしまった。すでに「後天」に落ちてしまったので、本来のあるべき所に帰り、「先天」を修復せねばならないのであって、そうすれば生涯を終えた後、瑤池に帰ることができる、とする。」⁽⁸⁾ここでいう「先天」とか「後天」と言う語がどのように現在のカオダイ教徒に理解されているかを、カオダイ辞典(Cao Đài Từ Điển)⁽⁹⁾によって調べると、「先天 (Tiên Thiên) とは、天地が造り出される前の時期であり、後天 (Hậu Thiên) とは、天地が造り出

された後の時期である。」とあることから、時期区分に関する概念と知れる。また、同辞典には、「カオダイ教の宇宙観に従えば、天地が未だない時代、広大な空間の中に鴻蒙たる気体が混沌としており、いわゆる虚無の気しかない時期であった。儒教で云う無極 (Vô Cực) であり、老教で云う道 (Đạo) であり、その気は真っ暗闇で遠く霞んではっきりせず、無秩序に入り混じる以前の清であった。

次第にこの気が凝集して、本当に大きな時間を経て、別の空間を輝かしく照らす一つの大靈光 (Đại Linh Quang) の塊を造り出した。この塊は、儒教でいう太極 (Thái Cực) であり、この塊は正に宇宙の大渾 (Đại Hồn) であり、いわゆる太極聖皇 (Thái Cực Thánh Hoàng) あるいは玉皇上帝 (Ngọc Hoàng Thượng Đế) とも言われるものである。

この塊は、完全に善であり全良、全知全能、千変万化であり、唯一最初の絶対的な原理である。

太極聖皇は、いわゆる陽光 (Dương quang) と陰光 (Âm quang) とも言われる陽義 (Nghi Dương) と陰義 (Nghi Âm) の両義 (Lưỡng Nghi) である二つの気を分けて造成するために太極を用いている。

この陰陽の二気は、転回して擬することがなく、時が経つほどますます速くなり、陰陽が結合するために、猛烈な爆発音を引き起こし、物質を造成し、勢いよく大きな物質の塊を周囲に破裂させ、大地や球状を形作るようになった。この時初めて、物質の有位の形体を持った宇宙の乾坤 (Càn Khôn) の最初であり、その後次第に地球上の各生物が出現したのである。

無極から陰陽両義のあるまでの時期、すなわち天地のできる前の時期が、いわゆる先天である。この時期はまだ無為 (vô vi) 無形の状態にある。この有無の根源がない時期は、無始 (Vô thi) の時期とも言うことができる。

陰陽両義のある時期から、すなわち天地の区分を確定し、各星や天地を造化し、万物を化生

した時期を、一切の物の形のある時期に属す後天の時期と称することができる。

万物は皆、陰陽両義の起源を有し、後天の時期はまた始まりのある (Hữu thi) 時期とすることができる。逆に始まりの無い (Vô thi) 時期は先天に属する。」とある。

中国民間信仰の中での先天道とカオダイ教の中での「先天」の理解に、直接結びつきを窺わせる内容は、先天と言う語句のレベルでは見られない。

2. カオダイ・ティエン・ティエン派の創設過程

上述した先天カオダイの概説の中でも少なからざる差があることは明らかである。本章では大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 巻Ⅱ 開明から支派の分裂までの伝道 (1926-1938)』⁽¹⁰⁾を基に創設過程に限定して考察を進めたい。

「先天 (ティエン・ティエン: Tiên Thiên) は、大道三期普度 (Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ) の中の支派の一つであり、かなり特別な当初の歴史を持つ。20世紀の20年代から先天支道は、恩上 (Ôn Trên) の名号を使い、活動の方向をさだめた。恩上 (On Trên) とは、民衆のために降された神聖な境域に居られる神々の恵みのことである。恩上の語は、神聖な方々のみのために、あるいは至尊 (Chí Tôn) や仏母 (Phật Mẫu) だけのために使用することができる⁽¹¹⁾。

1933年に至り、恩上は人事を定め、1955年まで引き続き聖座 (Toà Thánh) を組み上げる事を論じ、先天聖会 (Hội Thánh Tiên Thiên) の活動を新たに今日まで続く安定したものとした。

先天支道 (chi Đạo Tiên Thiên) の形成史の記録について、別のカオダイ教支派と同じような種類のものではなく、今日では、当初の背景を知るのみである。」とあり、先天支道が他のカオダイ支派とは異なった形成史にあることが知れる。

20世紀初頭、南部のヴェトナムの地区では、

請仙扶機運動 (phong trào phò cơ thỉnh Tiên) が一斉に広がっていた。機を扶ける (phò cơ) 事、すなわち扶鸞も、多くの程度があり、平常は各靈の役割に関わる機を立てる場のことを言うのではなく、ただ特別な各仙壇 (đàn Tiên) (あるいはいわゆる家壇 (nhà đàn)) が天の儀式 (Thiên điển) に関わることができることを言うのみである。このような壇は以下のようにかなりたくさんある。すなわち、トゥ・ダウ・モット壇 (đàn Thủ Dầu Một), カイ・ケェ壇 (đàn Cái Khế) (カン・トォ (Cần Thơ)), ハ・ティエン壇 (đàn Hà Tiên), フウ・クオックにおける壇 (đàn ở Phú Quốc), チョ・ガオ壇 (đàn Chợ Gạo) (チョ・ロン (Chợ Lớn)), ノイ廟における壇 (đàn ở Miếu Nổi), ゴック・ホアン寺における壇 (đàn ở chùa Ngọc Hoàng) (ダ・カオ (Đa Kao)), カオ・ランにおける壇 (đàn ở Cao Lãnh)... このような各壇はみな、三期普度 (Tam Kỳ Phổ Độ) の時期のカオダイの出現について予知していた。もし十分な統計資料を取っていたら、このような家壇の数は極めて多かったであろう。

上述したようなカオダイ教と多少とも関連のある各仙壇 (Đàn Tiên) が出現した現象については定かではないが、カオダイの解釈は「天機 (Cơ Trời)」によるものであるとし、すなわち恩上の領土において順調な精神が教え (Đạo) に向かっていきつつある一面を準備しているということである。

カオダイ教が開明 (Khải Minh) した時 (丙寅 (1926) の年10月15日) まで、各仙壇現象 (Hiện tượng các đàn Tiên) はずうっと継続していた。いくつかは閉ざされた場所であったが、別のいくつかの場所は開かれた場所であった。活動を継続している各仙壇の中には、カオダイの名号で典故を降す神聖な場所も大変多く、そこでは三期普度の教理が論じられた。各仙壇から降り論じられた神聖なおことばを通して降された教理は、タイニンにおける聖なる教え (Thánh Giáo) と大きくは異なっていなかった。

丙寅の年1926年のこの時まで、各仙壇はどこ

でも自分の家で独立して活動をしており、若干の壇が、恩上から特別の名前（しかし、いわゆる聖室 (Thánh Thất) ではない) を授けられたが、いかなるカオダイ聖会 (Hội Thánh Cao Đài) の管理系統の中にも依然として置かれていなかった。

それでも、大道 (Đại Đạo) が開明したときまでには、天機はまた調整して移転された。「縁 (duyên)」が十分ではない多くの壇は、(チョ・ガオ壇... のように) 機を閉ざさざるを得ず、またいくつかは、カオ・ティエン壇 (Cao Thiên Đàn) (ラック・ジャ (Rach Giá)) がミン・チョン・リー (Minh Chon Lý) に入り、ミン・ティエン壇 (Minh Thiên Đàn) (バック・リュウ (Bạc Liêu)) がミン・チョン・ダオ (Minh Chon Đạo) に入り、他の多くの壇がタイニン聖座 (Toà Thánh Tây Ninh) やあるいはバン・チン・ダオ (Ban Chinh Đạo) の系統に加入したように、各聖会に入って安定した。

たとえどのような理由があったとしても、多くの家壇が以前として独立して活動していた。そして、先天聖会 (Hội Thánh Tiên Thiên) は、このいくつかの各家壇を受け入れたうえで恩上が移すことができたことによる。

先天の最初の構築は以下のものであった。各仙壇 (đàn Tiên) は変わって聖浄 (Thánh tịnh) となり、ほとんど全ての人里離れた地区に置かれた。激しい戦を経験し、過ぎ去ったばかりの苦難が続いて、また平和になるまでに、72の聖浄と36家壇の多数が燃えるかあるいは少なくとも1回は移され、多い所はほぼ10回位に上り、『聖言経書 (Thánh ngôn kinh sách)』は初めの時期に散逸してしまった。しかしながら、昔の聖なる教え (Thánh giáo) の文章は、聡明な理知と至誠の心を備えた地方の二・三位の信友 (tín hữu) が、骨に刻み込んで文字句を逐一暗唱できるように覚えていた。現在、何事もなく穏やかなのは、この各位が子孫のために読んで明確に記録していた。多くの証人を通して調べた後、先天の歴史を記した人は、カオダイの厳かな歴

史に加えるための正式な史料としてこの記録を承認した。

先天機道 (Cơ Đạo Tiên Thiên) は、多くの家壇を集合したもので、1928年までに、10以上の場所を数えた。それゆえ、先支道 (Chi Đạo Tiên Thiên) は自発的にできたのではなく、前から最初に集合した多くの基礎と最初に領導した多くの人物とを準備してなったものである。

2001年の信史委員会 (Ban Tin Sử) 編纂による『先天カオダイ教略史 (Lược Sử Đạo Cao Đài Tiên Thiên)』62頁には次のように記されていると大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 卷II 開明から支派の分裂までの伝道 (1926-1938)』の註235⁽¹²⁾の中でこの10以上の場所について具体的に記述されている。すなわち、「機筆 (cơ bút) を求める運動は、南部各地に発展した。特に各グループがこの後に先天カオダイの行の形態に集合した。そのグループは以下の如くである。

1. 1913年、タップ・ムウオイ (Tháp Mười) のミイ・ディエン (Mỹ Điền) のキン・バ (Kinh Ba) において、チュオン・ディン・ダウ (Trương Đình Đầu), ファン・ヴァン・スン (Phan Văn Xứng), グウエン・ヴァン・ラム (Nguyễn Văn Lâm), グウエン・ヴァン・チュン (Nguyễn Văn Trung) の各氏によるグループ。
2. 1914年、ミイ・トオ (Mỹ Tho) のカイ・ライ (Cai Lậy) のカム・ソン社 (xã Cẩm Sơn) におけるヒエップ氏 (ông Hiệp) の自宅におけるグループ。
3. 1919年、タップ・ムウオイにおけるフウイン・ヴァン・トン (Huỳnh Văn Tôn) 氏の自宅におけるグループ。
4. 1920年、ミイ・トオのカイ・ライのミイ・フウオク・タイ (Mỹ Phước Tây) のラン・ビエン (Láng Biền) 邑において、グウエン・ティ・トゥ (Nguyễn Thị Tú) 婆の自宅におけるグループ。
5. ヴィン・ロン (Vĩnh Long) のタム・ビン (Tam

- Binh) のトゥオン・ロック (Tuông Lộc) 社における、ファン・ヴァン・トン (Phan Văn Tông) 氏のグループ。
6. 1925年, ゴォ・コン (Gò Công) 地区に属する各童子, すなわちミィ・トォやロン・アン (Long An) 省の別の地域での活動でのグウエン・ヴァン・サム (Nguyễn Văn Sâm), 十善 (Mười Thiện) …のグループ。
 7. 1927年, バック・リュウ (Bac Liêu), ソック・チャン (Sóc Trăng) 各省で活動するレェ・クウアン・ギィエム (Lê Quang Nghiêm), グウエン・フウ・トゥ (Nguyễn Phú Thứ) …のグループ。
 8. 1927年, ヴィン・ロンのロン・ホ (Long Hồ) のビン・ホァ・フウオク (Bình Hoà Phước) 社における, フェ・ドゥック (Huệ Đức) 氏, 大徳真師 (Đại Đức Chơn Sư) …のグループ。
 9. 1927年, ライ・ティエウ (Lái Thiêu) における, レェ・キム・ティ (Lê Kim Ty), チャン・コン・バン (Trần Công Ban) …のグループ。
 10. 1928年, ベン・チェ (Bến Tre) のタイン・フウ (Thành Phú) のダイ・ディエン (Đại Điền) 社において, グウエン・タン・ホォアイ (Nguyễn Tấn Hoài) 氏の自宅で壇を求めた (cầu đàn) フェ・トン・クウアン (Huệ Thông Quang) 童子によるグループ。
 11. 1928年, ベン・チェのチャウ・タイン (Châu Thành) のフウ・フン (Phú Hưng) におけるグウエン・ブウ・タイ (Nguyễn Bửu Tài) 氏のグループ。
 12. 1928年, ティエン・ザン (Tiền Giang) のカイ・ベ (Cái Bè) のアン・タイ・ドン (An Thái Đông) 社におけるホォ・ヴァン・トゥ (Hồ Văn Tự) 氏やグウエン・ティ・ラ (Nguyễn Thị Là) 婆…のグループ。
 13. 1926年, チュオン・ニュ・ティ (Trương Như Thị) 氏の自宅においてキム・リン浄家 (nhà tịnh Kim Linh) を成立させたグループ。」である。

(1) . 当初の主要な基礎

① 道德蓬廬 (Lư Bồng Đạo Đức)

20世紀初め, ミィ・トォ (現在のティエン・ザン) のカイ・ライのミィ・フウオク・タイ (Mỹ Phước Tây) 社ラン・ビィエン (Láng Biển) 邑に, 品行が正しく儉しいグウエン・ティ・トゥ (Nguyễn Thị Tứ) 婆様がおられ, ミン・スウ (明師 Minh Sư) に遵って修行する事を発心した。その後, 老婆は自らと近隣の地域の各道友 (đạo hữu) の縁を助けるために道德蓬廬の座を立てた。およそ1922年, ここにおける修行はひっそりとしたものから, 恩上の儀式すなわち扶鸞に接する玉機 (ngọc cơ) を扶けることに熟達している (ミン・スウの信徒でもある) ティエン・アン (天恩 Thiên Ân) とミン・ドゥック (明德 Minh Đức) の二位の童子が出現した時に確実に沸騰するようになったと記されている。

このグウエン・ティ・トゥ (Nguyễn Thị Tứ) (1847-1932) 婆にはチャン・ヴァン・トン (Trần Văn Thông) (1840-1899) という夫がおり, 二人の間に9人の子供がいた。すなわち, チャン・ヴァン・ズウオン (Trần Văn Dương), チャン・ヴァン・リエウ (Trần Văn Liễu), チャン・ヴァン・マイ (Trần Văn Mai), チャン・ヴァン・トゥン (Trần Văn Tùng), チャン・ヴァン・ディエン (Trần Văn Điền), チャン・ティ・ニョ (Trần Thị Nho), (早死), チャン・ティ・ハン (Trần Thị Hàng) とチャン・ゴック・スン (Trần Ngọc Sung) である。婆様の子孫の多くが教えの道業を継いでいる。すなわち, チャン・ヴァン・ズウオンは長寿の教友の品であり, チャン・ヴァン・ディエンにはチャン・ヴァン・ティエン (Trần Văn Thiện) とチャン・ヴァン・リエン (Trần Văn Liễn) という童子となった子供がおり, 修行して尚配師 (Thượng Phối Sư) となったチャン・ゴック・スン (道名ティエン・フウエン・クウアン (Thiên Huyền Quang)) には読み手となったチャン・ヴァン・ヴィエン (Trần Văn Viễn) という子供がいた。

また、ティエン・アンとミン・ドゥックの二位の童子の来歴については、これまで誰にも知られていないようである。頭師 (Đầu Sư) タイ・ニ・ティン (Thái Nhi Tinh) 大兄 (先天聖会, 1917年生まれ, 小さい時から教えを行っていた) は、次のことを記憶しているだけであった。すなわち, 約1930年, 二位がおよそ40歳で, ミン・スウの修行をし, 個人的な読み手や典記者や法壇を持たずに独立して機を扶けた。初めについてもその後についても明らかではないことが大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 卷Ⅱ 開明から支派の分裂までの伝道(1926-1938)』註237⁽¹³⁾から知られる。

(多くの人が天護グウエン・ズイ・ズウオン (Thiên Hộ Nguyễn Duy Dương) と考えている) 神が降って, (タップ・ムウオイ (Tháp Mười) の) ゴ・タップ (Gò Tháp) にある寺を建てるために冥宝の跡を見つけ出すよう神霊に導いて下さるよう請う機をたすける事跡を添付することによって, 多くの人が記憶しこれまで褒め称えた詩の中の一つの原文は以下のようなものである。

「旧くは帥明日は兵士がタップ・ムウオイの情景,
冥宝の珠玉は極めて貴重で大変多く, 数十に及ぶ
先帝の場所は殿塔に隠れ,
聖明のための時期をまさに待っている。
万将の孤魂は霊媒を拜命し,
前庭にある我が冥宝を隠す。
亡国身死のために忠を吟じ,
宝物はどのような所でも容易に…あざ笑う。」

このような壇の時間帯は周囲の俗世の人々に仙を招く機をたすけることを愛好する心を引き起こすこととなった。

さらに, 先天カオダイ歴史資料『団信史』, 1997, 11頁によると「その時期は先天を学び修める機の芽生えが始まった時期でもあり, 尊敬すべきフウイン・ヴァン・トン (Huỳnh Văn Tồn), フウイン・コン・カイン (Huỳnh Công Khanh), チュオン・ディン・ダウ (Trương

Đình Đầu), グウエン・ヴァン・ラム (Nguyễn Văn Lâm) 氏らはいつも, 仙を求めるためにラン・ビエン邑 (ấp Láng Biền) におけるグウエン・ティ・トゥ (Nguyễn Thị Tú) 婆の息子であるチャン・ヴァン・スン (Trần Văn Sung) 氏の家に行った。」とある。

今後, チュオン・ディン・ダウ (? - 1939), グウエン・ヴァン・ラム (1880-1963) (太頭師グウエン・ヴァン・ニイ (Thái Đầu Sư Nguyễn Văn Nhi) 大兄のご尊父), ファン・ヴァン・スウオン (Phan Văn Xương), グウエン・ヴァン・ティ (Nguyễn Văn Ty) …のような各位はタップ・ムウオイのミイ・ディエン (Mỹ Điền) のキン・バ (Kinh Ba) にあるフウイン・クン聖浄 (Thánh tịnh Huỳnh Cung) において扶鸞を立てられた。

戦争によって, 1935年7月15日まで, 諸位をミイ・ディエンのミイ・ロイ (Mỹ Lợi) に立てたクウ・リン・モン聖浄 (Thánh Tịnh Cửu Linh Môn) に移さねばならなかった。クウ・リン・モン聖浄は8回動かさねばならず, 9回目は火事であった。平和の日から, 聖浄はドン・タップ省 (tỉnh Đồng Tháp) タップ・ムウオイ県 (huyện Tháp Mười) タイン・ミイ社 (xã Thạnh Mỹ) (太頭師グウエン・ヴァン・ニイ大兄の故郷) に安定しておかれた。

ティエン・アン (Thiên Ân), ミン・ドゥック (Minh Đức) の二位の童子は, 多くの場所で扶鸞の機をたすけ, 恩上が励まして一つの地方に個人的な童子を集めさせることをしたが, 当然のこととしてラン・ビエン (Láng Biền) においては最初の人であった。

グウエン・ティ・トゥ (Nguyễn Thị Tú) 婆の内孫には次のような各位が居られた。すなわち, フェ・ミイ・チョン (Huệ Mỹ Chon) (チャン・ヴァン・ナム (Trần Văn Năm)),

チャン・ヴァン・ティエン (Trần Văn Thiên), チャン・ヴァン・リエン (Trần Văn Liêng) …そしてフェ・アン・タイン (Huệ An Thanh) (グウエン・ヴァン・ティエン (Nguyễn

Văn Tiên)) とフエ・トン・クワン (Huê Thông Quang) (フウイン・コン・シン (Huỳnh Công Sinh)) の二位である。

別の各地でも、つぎのように、その後も童子を集める命令が下された。

ドン・タップ省 (tỉnh Đồng Tháp) タップ・ムウオイ県 (huyện Tháp Mười) ミイ・アン社 (xã Mỹ An) におけるフウイン・ヴァン・トン (Huỳnh Văn Tôn) 氏の自宅には、フエ・チュウ (Huê Chiếu) やレエ・ヴァン・ティエット (Lê Văn Thiệt) のような童子がおり、その後チン・イ (Chín Ý) やハイ・レエ (Hai Lê) の二位が加わった。(後には、この場所にタイン・ソン・ホア聖浄 (Thánh tịnh) が設立された。)

(現在のティエン・ザン省カイ・ライ郡カム・ソン社 (xã Cẩm Sơn) 2邑である)カム・タック邑 (ấp Cẩm Thạch) におけるゴォ・ヴァン・ヒイエップ (Ngô Văn Hiệp) (1881–1936) の自宅には、フエ・リエン・チョン (Huê Liên Chon) (ゴォ・ヴァン・トゥオン (Ngô Văn Tuồng)), フエ・ティエン・チョン (Huê Thiện Chon) (ヴォ・ヴァン・チュエン (Võ Văn Truyện)) 童子と (ゴォ・ヴァン・トゥオン氏の賢妻である) グウエン・ティ・ズイエム (Nguyễn Thị Diễm) が居た。(後には、この場所にヒイエン・ティエン・ヴォ聖浄 (Thánh tịnh Hiền Thiện Võ) が設立された。)

(現在のティエン・ザン省である)ミイ・トォ省カイ・ベェ郡 (quận Cái Bè) アン・タイ・ドン社 (xã An Thái Đông) に、ホォ・ヴァン・トゥ (Hồ Văn Tự) 氏とグウエン・ティ・ラ (Nguyễn Thị Là) 婆の自宅があった。(ホォ・ヴァン・トゥの7番目と9番目の子息である) フエ・カン (Huê Căn) (ホォ・ヴァン・タップ (Hồ Văn Tập)) とフウ・フエ・ズウエン (Hữu Huê Duyên) (ホォ・ヴァン・ビン (Hồ Văn Bình)) のような童子を訓練した場所である。二位の他には、ホン・ヴァン (Hong Văn) (チュオン・ヴァン・ウット (Trương Văn Út)), フエ・キエン・クワン (Huê Khiển Quang) (グウエン・

ティ・ドイ (Nguyễn Thị Dơi)), タイン・ラン・フウオン (Thanh Lan Hương) (ヴォ・ティ・トゥアン (Võ Thị Thuận)), バック・クック (Bạch Cúc) (グウエン・ティ・レエ (Nguyễn Thị Lễ)), ゴック・キム・リン (Ngọc Kim Linh) (ファミ・ティ・ホン・ガ (Phạm Thị Hồng Nga)), ホォ・ヴァン・ビンそしてチョン・クワン・トゥ・フウオク (Chon Quang Tú Phước) がいた。(後に、このグループはドン・クワン・チュック・カイン (Đồng Quan Trúoc Cảnh), ホア・ミン・チュック・カイン (Hoà Minh Trúoc Cảnh) とチュック・カイン・ミン・ダン (Trúoc Cảnh Minh Đán) の三つの聖浄を設立した。)

上述した各所、(そしておおよそ10地点のいまだ総括されてはいない幾つかの別の処は (ラン・ビエン (Láng Biền) の) 道德蓬盧 (Lu Bồng Đạo Đức) における童子の手によって最初の時期は影響を受けた。

後に童子がいるようになって、機をたすける活動も独立し、それぞれの地で個々に諭すために恩上の降された命令を受けることとなった。

そうであるとしても、グウエン・ティ・トゥ婆のご自宅における道德蓬盧の威信は依然として際立ったものであった。恩上は、この場所を用いて、先天機道 (Cơ Đạo Tiên Thiên) を開設されることとしたのであろう。

準備のために、1926年から、教えを順調に開くために、各家壇の代表を集めて集中した地点とするために、壇に仕えるおおよそ40人を十分に収容することができるように、恩上は道德蓬盧を拡張する命令を授けたとされる。この記述は、2005年1月10日にチャウ・ミン聖座で頭師タイ・ニ・ティン (Đầu Sư Thái Nhi Tinh) 大兄の言葉に従って記録されたものによっている⁽¹⁴⁾。その後で、恩上はこの場所にティエン・タイ・ティン (天台浄 Thiên Thai Tịnh) という名号を付し、別の各道派のように聖室 (Thánh Thất) という代わりに、先天の各聖堂 (thánh đường) を聖浄 (Thánh Tịnh) と称する方式を

開始した。

② 初期の際立った人物

i. ファン・ヴァン・トン (Phan Văn Tông)
(1881-1945)

『ファン・ヴァン・トン小史』⁽¹⁵⁾によれば、
ヴィン・ロン (Vĩnh Long) のタム・ビン (Tam Binh) の故郷で、ファン・ヴァン・トン師は幼少から儒学の根本を学んだ。長じて、豪放な性格のために広く交渉し、師はファン・ポイ・チャウ (Phan Bội Châu)、ファン・チュウ・チン (Phan Châu Trinh)、グウエン・アン・ニン (Nguyễn An Ninh) …のような各志士と接触し、日本や中国における見識を広げる機会を得た。

およそ40歳になって、ファン・ヴァン・トン師は以前から定められていた機縁 (cơ duyên) によって心霊生活に向かう決心をした。

このことについては、1997年、先天聖会信史委員会 (Ban Tín Sử Hội Thánh Tiên Thiên) は、資料を集めるためにハ・ティエン (Hà Tiên) のトオ・チャウ (Tô Châu) における (ミン・スウ (Minh Sư) の) バック・デエ寺 (chùa Bắc Đê) を訪れた機会にバオ・テエ・ハック・クワン (Bảo Thế Hắc Quang) (グウエン・タイン・スイック (Nguyễn Thành Xích)) 大兄が詩篇を蒐集していたと述べられた。すなわち、

「志ありて尋ねれば、直ちに道は広く開け、
三期の恩典は、カオダイを立てる。

トン (Tông) とズウオン (Dương) は真伝の
特質を悟り

協共の精神、これ本来の気なり。」

フウエン・ティエン上帝 (Đức Huyền Thiên Thượng Đê) による1910年のこの詩は、世に出でしカオダイの先輩の言葉として見るができる。この中で、ファン・ヴァン・トン師の名を繰り返しており、師の別の名前はズウオン (Dương) であった。

師はタム・ビンの故郷に戻って、(トゥオン・ロック社 (xã Trường Lộc) の) 個人の土地の上にリン・チャウ・キム・ドゥック家壇 (nhà

dàn Linh Châu Kim Đức) をその地に立てた。それから師はレエ・タイン・タン (Lê Thành Thân)、チュオン・ニュ・ティ (Trương Như Thị)、チュオン・ニュ・マウ (Trương Như Mậu)、ファン・ルウオン・ヒイエ (Phan Lương Hiền)、ファン・ルウオン・バウ (Phan Lương Báu)、グウエン・フウ・トゥ (Nguyễn Phú Thứ) …各位のような多くの仲間と縁を結んだ。

多くの方々がリン・チャウ・キム・ドゥックにおいていつものように仙を求める壇を立てた。(バック・リエウ (Bạc Liêu) で立てるに至った。ミン・ティエン・ダン (Minh Thiên Đản) の童子によってこの壇は知られていたという意見もある。)

一度、至尊が降り、詩を授けた。

「三江協一して、真伝を明かす。

平水相逢うは、当然の道理。

民国の乱に関心なく、睡ること永し。

この俗界を補修して、真正を保つ。

道徳は、善良で心の広き者の召使とならん。

三協の陽珠は義の割り当てを探し、

時に三協は安らかな教えを家を設ける。

(「タム・ビン・ヴィン・ロン (Tam Binh Vĩnh Long) は、三期の教えを改める」観首)

「三期道 (Đạo Tam Kỳ)」に関して最初に開かれてから、上述したように次第に恩上は機を差し出して与えるようになり、1924年に至り当時の時点で (天台浄) 道徳蓬盧 (Lư Bồng Đạo Đức (Thiên Thai Tịnh)) と関連のあった壇であるリン・チャウ・キム・ドゥックにおいて各位を諭された。

そしてファン・ヴァン・トン師が道徳蓬盧と協力して心と同じくされた時から、ヴィン・ロン、カン・トオ (Cần Thơ)、チャ・ヴィン (Trà Vinh)、ソク・チャン (Sóc Trăng)、バック・リエウ…のような周辺地域の承認を得て、一層広範囲に周知させることができるよう、扶鸞すなわち、仙を招く機をたすける運動を行った。恩上が壇に降られた時は、例えどの地であろうと

も、皆地方のための道徳を修行する道を次第に定め、カオダイが世に出るであろう仙の報せを伝えた。

一例をあげると、1924年1月15日に至って、グウエン・ズイ・ズウオン (Nguyễn Duy Dương) 大神 (Đại Thần) が道徳蓬盧に降って、次のような詩を授けた。

「南家の大業、四千年を経、
神は主聖 (Chúa Thánh) を扶け、江山を定む。
阮の忠義は、亡国・身を滅ぼすが為であり、
ただ歴史の碑は、勲功記念簿を刻むのみ。
義士の分を降し、桑蓬の志を示し、
三期の国の教え、カオダイを立てる。
これより祖国、災厄を免る。

(観首:グウエン・ズイ・ズウオン大神が降る)

上述した多くの詩は、ファン・ヴァン・トン師 (と他の先輩各位) の正しく愛国の心情を述べたものであり、またカオダイ三期…の名号をよく知っている諸位のためのものである。

ii. グウエン・フウ・チン (Nguyễn Hữu Chính) 師 (1890-1946)

大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 卷Ⅱ 開明から支派の分裂までの伝道 (1926-1938)』は、『グウエン・フウ・チン師小史』を参照した上で、「自らの「政治的」能力によって、一人で個人的に行っているそれぞれの家壇を連ね、組織的運動として幅広く際立った活動をしたファン・ヴァン・トン師とは別に、グウエン・フウ・チン師は敬奉、供献…をして心霊に帰依するさまざまな仕事に専念し、深く傾倒した。時に童子の練習や各壇機を立てる時の指導をなされた。」と記し、ファン・ヴァン・トンがオルガナイザーとして秀でていたのに比し、グウエン・フウ・チンが信仰者として秀でている点を強調している。

加えて、ティエン・カイ・フウオン・ヒエウ編纂『道史 Ⅱ』ロネオ印刷の212頁の「李太白の1927年2月7日丁卯1月6日、ゴォ・ケン寺 (chùa Gò Kén) における聖なる教えの壇があり、

「我らが賢友を玉派の教友の職に封ず。」この時期長生きをした教友の品は未だ多くなく、グウエン・フウ・チン師に封じられた聖なる教えの恩情であるということが出来る。」と引用して、タイニン聖座の玉派の教友に封じられた点を踏まえて、「天の封じた高齢の教友は、タイニン聖座における (ゴック・チン・タイン) 玉派に属し、グウエン・フウ・チン師は、1927-1932年の間、(カイン・ハウ (Khánh Hậu), タン・アン (Tân An) 省の) フウ・トォ (Phù Thờ) の家壇⁽¹⁶⁾と同じ時に活動していた。モック・ソン・キン (Mộc Sơn Kinh) 家壇を創出し、ロン・アン (Long An) 省ミイ・アン (Mỹ An) のラング・コ (Láng Cò) 地区にあって、教えを行った。ここで扶鸞を行うことの影響は周辺各地に拡大し、たちどころにタイニンにまで反響があった。タイニン聖座におわす各位は警戒し、扶鸞をやめさせることを期待して多くの『周知 (Châu Tri)』を發布した。1929年7月15日の周知が代表的なので、以下の段を示す。

「大慈父 (Đại Từ Phụ) の聖言 (Thánh Ngôn) はただ機筆を明らかにするのみであり、最も重要なものである。自ら互いに楽しみを求めたり、その上まだ教えの外の人を咎めたり、厳しく批判したりすることを伝えたりするべきではない。それは至尊 (Đức Chí Tôn) に対する大罪である。」

私たちは、この『周知』には正配師タイ・トゥ・タイン (Chánh Phối Sư Thái Thơ Thanh) とゴック・チャン・タイン (Ngọc Trang Thanh) の二位の署名の他に、更に尚正配師の権であるタイ・カ・タイン (Quyền Thượng Chánh Phối Sư Thái Ca Thanh) の署名があることに留意している。」としている。

この条は、1929年7月の時点で、タイ・カ・タイン師が未だにミイ・トォに戻って直ぐに分かれてはおらず、また (ラック・ジャ (Rach Giá) の) カオ・ティエン壇 (Cao Thiên Đàn) や (バック・リエウの) ミン・ティエン壇 (Minh Thiên Đàn) としっかりとした協力は未

だできていなかったことを証明している。

それ以前に、1927年6月1日の『周知』の中で、トゥオン・チュン・ニュット (Thượng Trung Nhựt) 師は次のことに留意されておられた。

「私は多くの道友が、きつい練習をして機筆 (cơ bút) を慕い愛好し、多くの言葉が立てられ、(ミイ・トオの) トウオック・ニュー (Thuộc Nhiêu) における一人の道友のように、そしてさらに (ザ・ディンの) ヴィン・ロク (Vinh Lộc) における二道友のように、鬼に入られて愚かに変わるまでになった。」トゥオン・チュン・ニュット師のいわゆる「道友」の各位は、確かにカオダイに入門し、ミイ・トオ地区で活動し、その中にグウエン・フウ・チン師のグループがいたのである。

大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 卷Ⅱ 開明から支派の分裂までの伝道 (1926-1938)』では、以下のように続けている。すなわち、「1930年12月31日頭師ゴック・チャン・タインの権 (Quyền Đầu Sư Ngọc Trang Thanh) によって記された『周知』第67号は、実名で提起された各頭戸 (Đầu họ) や聖室主 (Chủ Thánh thất) 各位へ差し出された。

「私は多くの職色と多数の道友が作り話をし、世俗の人々を唆し迷惑をかけていると聞いたことがある。各聖室が罪を悔いることを求めることを普及させるまで、ミン・ドウオン (Minh Đường) とミン・スウ (Minh Sư) の古い律に従って教えを求めた。昼食や絶穀などなどを諭された。この幾多の人は自分の個人的意見を以って行うのであって、聖座の命令があつてのことではない。それは偽りの言葉であり、世の中にあつて尊師 (Tôn sư) となり自ら教えの高位に上り、世俗の人々を惑わしたいと思っている幾多の人もいた。実際に、確かに大道三期普度に反し害していた。私は次のことを知った。

1. チン教友 (ゴック・チン・タイン (Ngọc Chính Thanh)) がいることは、諸道友に迷惑であり、誓いを強いて、彼は護符の呪文を描いて水を掛けては上せ水を掛けては下し姿を晦まし

たり、理屈に合わないことをたくさんす練習をすることを教えた。

2. ミイ・トオに41歳のゴォ・ドゥック・ニュアン (Ngô Đức Nhuận) という名の方がおり、三期普度に従って入門してミン・スウによって修行し、本当に悟ったと作り話をし、道友に迷惑をかけ、更に食事してはいけないと教えた。野菜や果物の多くの迷信の話を作り話をし、顔や鼻に線香の煙をいれ目が眩んだりした。聖座はこのニュアン名とニュアン名に従う人達を追い出すつもりでいた。後日、後悔して修正した。」とある。この『周知』第67号は、チン教友の追放については触れられてはいない。

先天道の扶鸞に師が貢献したことは、「至尊の機筆 (Cơ bút Chí Tôn) は、チン氏を任じて (開き初めの時期の先天を領導する集団である) 七聖 (Thất Thánh) に入れることを許した。それゆえ当時の先天道は、チン (Chính), ティ (Ty), トン (Tông) の三雄 (Tam hùng) の名があった。」⁽¹⁷⁾ ことから知れよう。

iii. レエ・キム・ティ師 (Ngai Lê Kim Ty) (1893-1948)

大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 卷Ⅱ 開明から支派の分裂までの伝道 (1926-1938)』は、『レエ・キム・ティ師小史』を参照した上で次のように記している。

「ファン・ヴァン・トン (Phan Văn Tông) とグウエン・フウ・チンの二位と一緒に、レエ・キム・ティ師は、1927年丁卯1月8日にティエン・タイ・ティン (天台浄 Thiên Thai Tịnh) において至尊の聖なる教えの言葉のように、最初の時期の先天を領導した人物に名を連ねることができた。

「トン、ティは十分な徳才に恵まれた子であり、フウ・チンと協力して支派を開設せん。

七聖 (Thất Thánh) を形成し、後に師 (Thầy) が手渡し、

七賢 (Thất Hiền) を集めて、開かれた教えを歩ましめん。」

青龍 (Thanh Long) 翁は、自らの回想記の中で次のように記録している。「第一次世界大戦が終結したあとのヴェトナムにあって、特にサイゴンでは、自由民権民主を要求する運動が一層強力に鼓吹され、新聞と雑誌が呼びかけたり、ファン・チュウ・チン (Phan Chu Trinh) 翁や、ファン・ヴァン・チュオン (Phan Văn Trường) ・グウエン・アン・ニン (Nguyễn An Ninh) ・グウエン・ファン・ロン (Nguyễn Phan Long) 各翁と連携して、この運動を鼓舞するために演説を行ったり、相互の組織が交代でそれぞれの見解を述べたりした。その集会の時には、黎翁 (cụ Lê) は皆出席し、初めは傍聴していた人も、後には組織人となっていた。」

メコン・デルタ (đồng bằng sông Cửu Long) に居住し活動しているほとんど全ての先天を指導している各位とは異なって、レエ・キム・ティ師はサイゴンで暮らしていた。このことは、先天の影響を普及させる事を助け、異なった地に広めるためにかなり重要な連絡・通信の橋頭堡の一つであった。

ファン・ヴァン・トン、グウエン・フウ・チンとレエ・キム・ティの三位は、先天支道を形成する初期において「共同戦線 (công trận)」を組んで、各位に非常に多くの人を集めるための、上述したような典型的な代表であるにすぎない。先に言及した人物や更に各地方における匿名の多くの人物のような別の多くの方々がこの教えの功績に寄与した。」

第一次世界大戦の後の自由民権民主要求運動とメコンデルタにおけるファン・ヴァン・トン、グウエン・フウ・チンとレエ・キム・ティの三位の先天支道形成初期における「共同戦線」は興味深い。

(2) 聖会 (Hội Thánh) の最初の形成期

i. 天皇 (Thiên Hoàng), 地皇 (Địa Hoàng), 人皇 (Nhân Hoàng) の開会

恐らく上述したことは異なって、カオダイ教先天派の概要でみたように、先天道派の歴史

について概説した記述は、ほとんどすべて皆1930年にタイニン聖座から分かれたゴック・チン・タイン (グウエン・フウ・チン) 教友から始まったとしている。それは先天カオダイ内部の認識の一部にも共有されていた。すなわち、先天カオダイ聖会による『天の封じた教宗 (Giáo Tông) 小史』の巻の中の「星衣原本 (sao y bản chính)」(2003年印刷) 13頁で、天の封じたグウエン・ブウ・タイ (Nguyễn Bửu Tài) 師は次のように記した。「グウエン・フウ・チン氏はタイニンから分かれ久しい以前より先天派を立てた。」この小史で、天の封じた師は丙申の年(1956)に書き、そして他の作家のための基礎となるであろう上述の句を根拠として、先天の歴史にまた「チン教友によって成立した」と記した。

先天カオダイ⁽¹⁸⁾の歴史を記すことに責任を持つ方々は、先天支道の起源がそれ以前からあったことを肯定することである。正式な先天は聖会の形成から開始され、その後には恩上が会的前提とする天皇・地皇・人皇の三局を整えたことにある。

「1924年甲子の年1月9日、(子 (Tý) において天が開き、また上元 (Thượng Nguyên) でもある) 天皇が会を開く。

1925年乙丑の年10月15日、(丑 (Sửu) において地開、また下元 (Hạ Nguyên) でもある) 地皇の会を、

1926年丙寅の年7月15日、(寅 (Dần) において人生じ、また中元 (Trung Nguyên) でもある) 人皇が会を開く。」⁽¹⁹⁾

この各会は、(ラン・ビエンの) 道德蓬盧に設立され、世俗の人が多く集まることもなく、ただ無為 (vô vi) の象徴を造っただけのようである。この段階に至って記憶にとどめることのできる詩篇の一つは次のものである。

「天を代え地を替える、天皇の会にて、

十二主が子 (Tý) に至り会す。

大道化成して、万法を生じ、

仏仙神聖は機関を寿ぐ。

我が三期はかくて恩典を施し、
我がカオダイの名は世間を救う。
正しき教えを伝える真師が復し、
しっかりと修め念ずれば、清らかで静かな
暮らしを享受す」

ii. 聖会をはじめて形成する

大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 巻Ⅱ 開明から支派の分裂までの伝道 (1926-1938)』によると、聖会の形成初期は、「1927年(丁卯)の時点で、ファン・ヴァン・トン、レエ・キム・ティ、グウエン・テェ・ヒエン、チャン・ロイ、グウエン・タン・ホアイ、…が道徳活動の中で共同して協力した各位のように、多くの方々は生活の外の社会的地位においても威信を保っていた。

諸々の方々は(ラン・ビエンの)道徳蓬盧に戻り、常に壇に仕え、お互いに教えの道事を論議していた。

恩上は、この機会に先天支道を成立させることについて、諸々の方々の意識に種を撒かれた。(1927年丁卯の年1月8日)天台浄におけるこの年の壇の中で、至尊は次のように論された。

「玉は五州を照らし、世界は化し、
皇は下元の三度尽くすを求める。

上は大道を開き、三教を貴び、
帝は五枝(Ngũ Chi)と協力して一家を体す。
カオダイの筆先はロン・ホアにあって神秘を授ける

国の教えが成立し、南鴻落つ:
大いなる教理は全てに渡って国家に同じくす。」

(観首: 玉皇上帝先天立教)

この日、先天道を開くことの重要さを諸々の方々の意識に諭された後、師は命を授けた。

「師は限りなく神秘的な先天の七十二浄場を完成させねばならない、分かりましたねと各子ども達に命令を降した。」

(頭師タイ・ニィ・ティン大兄の七番目の子息であり、ドン・タップ省先天カオダイ代表で

ある)道兄伝状グウエン・ヴァン・クンは、ちょうど上述した聖なる教えの詩文とその中での幾つかの先天聖教を守り留めていたことによる。」とある。

iii. 招聖大会 (Đại Hội Chiêu Thánh)

天の封じた七聖 (Thiên Phong Thất Thánh)

1928年に至り先天機道は一時期を献上した。

「1928年戊辰の年1月9日、天台浄において招聖大会 (Đại Hội Chiêu Thánh) が開かれ、七聖 (Thất Thánh) の指導する集団によって最初の時期の中央教権 (giáo quyền trung ương) が成立した。この七聖には、協力を呼びかける聖令 (Thánh lệnh) を得る各地から先天を修め学ぶグループの指導者を含んでいた。七聖の名には恩上の認めた以下の方を得ている。

1. ファン・ヴァン・トン (Phan Văn Tông)
2. グウエン・フウ・チン (Nguyễn Hữu Chính)
3. グウエン・テェ・ヒエン (Nguyễn Thế Hiển)
4. レエ・キム・ティ (Lê Kim Ty)
5. チャン・ロイ (Trần Lợi)
6. グウエン・ブウ・タイ (Nguyễn Bửu Tài)
7. グウエン・タン・ホアイ (Nguyễn Tấn Hoài)

この時恩上が名前を点検したにもかかわらず、各七聖は未だ全員揃ってはいなかった⁽²⁰⁾。」概ね、七聖は最初の中核的人事要素であり、そこから先天聖会 (Hội Thánh Tiên Thiên) が形成された。1932~1933年までの段階で、諸々の方々が次第に集まってきていた。

七聖の小史について考察した後、グウエン・フウ・チン、レエ・キム・ティ、グウエン・タン・ホアイ、…はタイニン (もしくは直轄の衆生を濟度するための壇) に入門していた何人かの貴い師に我々は気づいていた。(後には各聖浄となった) 各家壇にあって、機を求める経、儀礼、経、敬って仕える方法とを付け加えた。最初の各経典の中に印刷されている教えの年を記録する方法のように、先天支道の形成過程の

中で、欲すると欲さないとにかかわらず、タイニンの要素が依然としてある程度影響していた。

iv. 一歩づつ中央教権を形成する

引き続き大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 巻Ⅱ 開明から支派の分裂までの伝道 (1926-1938)』によって、中央教権の形成過程を見ると以下ようになる。「聖会が成立し、恩上はいつも初めから正確に低位から高位に上る十分な職色を伴って、しっかりした中央教権の系統に関する人事を配置した。しかし先天道の場合、恩上は幾分別の方法を運用した。すなわち、(七聖の) 枠組みを形成しただけの最初の時は、なおまた、たとえ職色に封じられたいくらかの位にあっても、未だ教権の系統を形作ってはいなかった。一定の時間後、恩上は新たに教宗、掌法、頭師という各品に当たる十分な人事を選任した。

1930年から1932年までに、先天道はかなり順調に運び、(以前に考慮されていたように) ただ小さな個人的な幾つかの地方においてのみ新たに順調であるだけで、全体としては未だ十分には集まってはいなかった。

具体的一例をあげると、1934年5月の(ミン・チョン・ダオ(Minh Chon Dao)の)フウオック・ロン(Phước Long)において組織された道理会(Hội Lý Đạo)の中で、先天に整理されていなかった組織を受け、(ヴィン・ロン(Vinh Long)の)ロン・ホアン庵寺聖浄(Thánh Tịnh Long Hoàng Am Tự)において聖なる教えに至るまで大会の中での総括が繰り返されたにもかかわらず、先天はカオダイ三江(Cao Đài Tam Giang)、基督教(Cơ Đốc Giáo)、仏教(Phật Giáo)…タイニンに隣接する教えの一派となった。

内部の中から、この時点に至って、(おそらくは聖会組織が未だすっかり完成していなかったであろうため) 自らの先天道の支流に関するはっきりとした意識を多くの人が未だに持って

いないように見えた。天台浄において1933年に出版された『八門経(Kinh Bát Môn)』の外表紙に、「大道三期普度—ミィ・フック・タイ(Mỹ Phước Tây)」と記されていた。また「先天元会(Tiên Thiên Nguyên Hội)」の句が加えられていたが、「先天」を直ちにいわゆる聖座の場所のつもり表現とはとても思っはなかった。

先天の活動を取扱うために、恩上も特別の方式を使用した。西部の河川地区の交通手段によって、この時はかなり困難であったが、それぞれの地方を補う聖餐式の部分が皆あり、各神々が協力して教えの仕事をするためにかつて直接に命令を手渡したことがあった。

「一期の大会に平均して3~5ヶ月かかるにもかかわらず、大会を開催する機会に当たって新しい聖浄を落成した。新しい聖浄を建設する度毎に、組織は扶鸞によって得た機筆(cơ bút)の命令によって皆割り当てられた。それぞれの地における機筆は、本教えが参加して、運んで祀られた。建設の工事を起こす日まで、三江全てに渡る本道は、功果となさせていただくまで誘い合って祀った。

おそらくは、先天道における機筆問題に関して付け加えるなら、これもかなり特別なことであった。すなわち、

「1934年末に至って誕生し、丸々4年を経ずして、三江全てに渡って拡張し、計画したようにほぼ72聖浄を建設した。このようにする所以は、神仙(Thần Tiên)によって運ばれた摩訶不思議な機筆のおかげである。先天派には、正式には12ペアーの童子と多くの扶鸞を補佐する方がおり、壇があればどこでも神仙が降り教えを垂れることがあった。

内部で3壇機、外部で2壇機が正殿(Chính Điện)に配置され、1回に(3組の童子により)3度の壇機(đàn cơ)、あるいは5ないし7度の壇機があった。ヒエップ・ティエン・ダイ(協天台 Hiệp Thiên Đài)全てには、盤機(bàn cơ)が二つ設けられている。それぞれの壇には童子、法壇、読み手、典記が特に一単位として

ある。例えば、一度の仕事で5盤機を一緒にすると、それぞれの盤機にお互いに異なる神聖な方が降り諭される。しかし、長編の文章ならば一緒にの一文である。機に従って1回に書くが、機が命令を出して読む時、典記は盤機を1度に1段を読みあげ、続いて2番目の盤機に移り次の一段に従う、2番目の盤機に続いて3番目、3番目の盤に続いて4番目、4番目の盤に続いて5番目、最後は5番目の盤機に続いて初めの盤機で終わり、文学的な脈絡を持ち、意義に満ちた長編の文章となる。

それは通常は不可思議なことで、神・仙・仏の形あるものを試そうとする異教の者の密かな企みに、例えば儀礼を破った人は意識を失うまで罰して応える場合のように、信伏している全ての人のために、他にも定例会議の度ごとに別の不可思議なことがあった。

おかげで、大会の度毎に、教えにある人は益々勇気を奮い起こし、教えの外にいる人も教えに入り加わることを望み、先天道派は、そのようにして、急速に拡張した。⁽²¹⁾この段の後半の記述は陰陽一対の童子を中心とした扶鸞の具体的な役割分担と運用が具体的に記されており興味深い。中央教権の拡張は、指導層の拡充を必要としたためか、七聖について七賢が創設された。すなわち、「七聖に入る七位の点呼をとった後、恩上は別の七位を点検して七賢の列に加えた。その後で順番に、至尊が点検して「七賢 (Thất Hiền)」を以下のように形作った。

1. レエ・タイン・タン (Lê Thành Thân)
2. グウエン・フウ・トゥ (Nguyễn Phú Thứ)
3. ラム・クワン・ティ (Lâm Quang Tỳ)
4. ドアン・ヴァン・チュウ (Đoàn Văn Chiêu)
5. ファン・ルウオン・ヒエン (Phan Lương Hiền)
6. チュオン・ニュウ・マウ (Trương Như Mậu)
7. ファン・バァ・フォック (Phan Bá Phước)⁽²²⁾

恩上が七聖と七賢の点呼をとった時点では、未だに各資料の間の統一はとられていなかった。現在先天についての研究者達がまた調査し

ている。明らかなことは、それがまさに恩上が先天聖会を成立させた時点であるということであり、さらに決定的な要素として付け加えられることは、それがこの新しい支派の聖座であるということである。

(3) 聖会の基礎の安定

i. 天台 (Thiên Thai) — 先天の最初の聖座

天台浄(道德蓬盧)は、もともとはミイ・トオ、カイ・ライ、ミイ・フウオック・タイ社ラン・ビエン邑におけるグウエン・ティ・トゥ婆の私宅であり、恩上が先天支道の聖座とするために選び出したのである。

恩上は、どの時点になって天台聖座を成立させたのか?この問いはまだ具体的な資料と具体的な説明を待っているところである。我々は、しばらくの間は幾つかの史料を混ぜ合わせねばならない。

最初は、(1933年に印刷された)『八門経』のおもて表紙の写真であり、その写真には以前としてミイ・フウオック・タイ聖室 (Thánh Thất Mỹ Phước Tây) と記されており、さらには(1934年)フウオック・ロン聖室 (Thánh Thất Phước Long) における道理会議事録であろう。当時に至って、もし天台聖座が成立していたら、さらに新しいであろう。

1931年と1932年のタイニン聖座における二度の人生会 (Hội Nhơn Sanh) の中で、カオダイ教の状況についての議長の説明の言葉には、(ミイ・トオの) ミン・チョン・リイ (Minh Chon Lý) の分岐を提出するのみで、他のどのような支派にも全く言及しておらず、況や先天カオダイについては何も言っていない。

『無極宮西宗小史 (tiểu sử Tây Tông Vô Cực Cung)』⁽²³⁾の5頁に天法 (Thiên Pháp) の師が次のように記している。

「カオダイ9年9月7日に至り、天法のしもべが割り当てられた日であり、さらに浄に入った日でもある。不意にレエ・タイン・タン (Lê Thành Thân) 氏が訪ねてこられ、天法のしもべ

に聖なる教えの一段を導いて下さった。ここから天法のしもべは先天派を支援せよとの聖旨に従う。先天派の最初の聖座である。天台における天法のしもべの時間の中で、(1934年)カオダイ9年の末は、天台の九重台と協天台の座を作り上げることに幾多の大兄が心を傾け続けた時であることを意味している。

このようにして、資料を確定し、天台聖座は、八卦 (Bát Quái) を付け加えて協天台と九重台をいれた規模で建設された⁽²⁴⁾。

中央聖座があったことは、各家壇が各聖浄と一緒に承認と擁護を得たことであり、我々は次のように結論づけることができよう。すなわち、1933年末から1934年初めまでに、先天聖会は正式に世間の目の前に出て、ある時間の後で、恩上はその前のことを少しづつ調整することができた。

そうであるとしても、先天機道の特殊な性質によって、すなわち各聖浄が新たに建設した時から、直ちに高く独立を考えるつもりであって、多くの場所でまた個人的な機筆を行い、各神によって直接に壇に下され論されたことによって主要な聖会はとりあつかわれた。先天聖会の中央教権は、この年頭に至って教えの取り扱うのも皆恩上の聖なる教えに従って行われた。

時局によって、1937年丁丑の年に至るまで、先天聖会は (ベン・チェ (Bến Tre) ティエン・トゥウイ (Tiên Thủy) に) チャウ・ミン壇 (Châu Minh Đán) を選び聖座とし、土地を買ひまし、今日のような広大なチャウ・ミン聖座の建設と発展をなした。

ii. 七十二浄と三十六壇の建設

1927年丁卯の年の初め、至尊が七十二浄を立てる命令を發せられ、多数の「家壇」を順番に改変して聖浄となし、1936年丙子のに至って、極めて多くの聖浄が成立し得た。

七十二浄は、ハック・ロン・モン (黒龍門、

Hắc Long Môn) 聖浄における壇の時に師が点呼を取られた⁽²⁵⁾。

「大浄にして聖心な子達よ、各先天主聖浄での思い出を記録している師に聞き従いなさい。

詩篇

天台 (Thiên Thai) は功績を立てて判定を司り、詔勅は後天を整える。

明開は元に帰り集う場であり、

越南の地に、国の教え (Quốc Đạo) を成立す。蓬萊の景色は三度目の眩む明るい時期を迎え、

天然の律は明瞭に玄機 (huyền cơ) を諭す。

世の正法は幟に隠れ、神仙らは説明した詩を天会に委ねた。」

詩篇には77枚の切符を含んでおり、師は次の順番で72聖浄の点呼を取られた。

72聖浄については表1を参照されたい。なお、聖浄の名に添付した各地名は、現在変更させられた地もある。また、別の地点に移ったり、なくなったりした聖浄も少なくない。

加えて、各聖浄は、恩上のかなり早くに建設せよとの命令を得たために、ほとんどみんな板木で作られ、萱の葉で葺いたものであった。レエ・キム・ティは、各聖浄の大部分を建設する特別の責任を負った方だが、このことについて恩上に繰り返し申し上げ、次のような説明を得ていた。

「仕事は経済状態次第であると。賢く悟られよ。賢は72浄場 (trường Tịnh) には皆まで満足できないがまあまあであると認められよう。きっとどんな所でも清らかな場に値するではないか。もし必要なら後で修正しよう。もし一度堅固なものとするためには、刻限の日時に遅れたでしょう。」⁽²⁶⁾

次に36壇 (Tam Thập Lục Đán) (36家壇 (36 Nhà Đán)) であるが、この36壇は今日に至るも未だに統計上の条件を満たしてはいない。理由はたくさんあるが、最も重要なことは、多くの家壇が聖浄となることをかざしたが、戦争のために二三度場所を移転せざるをえなかった

り、若干の家壇は痕跡すらないためである。向後、各聖浄が自らの小史を記録し、各地方が地域を通して昔の各家壇の来歴を集め、聖会について大切に留めてきたことについての書名を一つ所に集めるよう活動を起こすことを希望する。

iii. 天の封ずる聖会の職色

1938年戊寅の年(聖座と72浄の建設のように)聖会にとっての物質的基礎が安定した後、至尊は七聖の諸位を高位の職色の品に慈しみ封じられ、先天聖会を指導させた。その日の壇は、(ベン・チェ省、ティエン・ロン (Tiên Long) の) アン・ロン・ホア・トゥ (安龍化寺, An Long Hoá Tự) 聖浄において、1938年戊寅の年9月3日にちょうど当たっていた。この壇で降された詩篇を通して、指導的な職色の名前が詩の中で記されている。すなわち、ファン・ヴァン・トン (Phan Văn Tông), レ・キム・ティ (Lê Kim Ty), グウエン・テ・ヒエン (Nguyễn Thế Hiển), グウエン・ブウ・タイ (Nguyễn Bửu Tài), グウエン・タン・ホアイ (Nguyễn Tấn Hoài), チャン・ロイ (Trần Lợi), ファン・バァ・フウオック (Phan Bá Phước) の7名であるが、七聖にグウエン・フウ・チン師が不足している。大道三期普度 大道教理普及機関『カオダイ教の歴史 巻Ⅱ 開明から支派の分裂までの伝道 (1926-1938)』では、この点を指摘した上で、註を付け、「恩上はファン・バァ・フウオック師を補充した。ここでは師について記させていただく。

ファン・バァ・フウオック師 (1877-1942) は丁丑の年に生まれ、ヴィン・ロンのティエン・ドゥック (Thiên Đức) の人で、ブイ・ティ・ティン (Bùi Thị Tịnh) 婆 (1879-1963) と家庭を作った。師は創業し、ヴィン・ロン省チョ・ラック県 (huyện Chợ Lách) タン・フォン社 (xã Tân Phong) におけるカイ・トン (該總, cai tông) となった。1932年先天支の七賢に寿ぎ封ぜられた。その後、1938年10月25日 (戊寅の年

9月3日) 師は、ベン・チェ省ティエン・ロンの安龍化寺において、玉頭師の品の七聖の列に入るよう封ぜられ昇格した。

玉頭師である師は1942年12月16日 (壬午の年11月2日) に登仙し、(ティエン・ザン省カイ・ライ, タン・フォン, タン・ブウオンA邑) の墓地に埋葬された。」としている⁽²⁷⁾。グウエン・フウ・チン師が七聖の座をファン・バァ・フウオック師に取って代わられた理由については不詳である。向後の考察を待ちたい。

おわりに

まず、中国民間信仰の中の先天道とカオダイ教の一支派としての先天カオダイ聖会との直接的なつながりを明かす資料は見られない。筆者のベン・チェ省チャウ・タイン県ティエン・トゥイ社の同派の聖座での調査では、瑤池金母を祀る等、中国先天道につながる個別的な信仰要素は見られたが、系統だっでの直接的な移入ではなく、19世紀の嗣徳期に明末清初の遺臣らにより齋された五支明道、中でもミン・スウ (明師, Minh Sư) やミン・ドゥオン (明道, Minh Đường) の影響を受けたものと思われる。この影響を受けたのは、カオダイ教支派でも先天派にとどまらず、ミン・チョン・ダオ (明真道, Minh Chơn Đạo) や多くの支派に及ぶ。解放後のカオダイ教諸派にあっては、扶鸞である壇機もしくは機筆は迷信として原則的には退けられているが、先天カオダイは扶鸞によってタイニン聖座から離れたが、むしろ72聖浄という扶鸞ネットワークを構築することにより拡大・発展もした。扶鸞の伝統に位置する点では、近代東アジアに広がる民間信仰の系譜に位置するといえよう。

次に、カオダイ・ティエン・ティエン派の創設過程についてまとめる。

「先天 (ティエン・ティエン: Tiên Thiên) は、大道三期普度 (Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ) の中の支派の一つであり、20世紀初頭、南部のヴェトナムで広がっていた請仙扶機運動 (phong

trào phò cơ đình Tiên) が基盤になっている。機を扶ける (phò cơ) 事, すなわち扶鸞もただ特別の各仙壇 (đàn Tiên) (あるいはいわゆる家壇 (nhà đàn)) が天の儀式 (Thiên điển) に関わることができることを言う。先天派は、機筆 (cơ bút) の使用を極めて重視しており、礼拝する基礎を聖室 (Thánh Thất) ではなく聖浄 (Thánh Tịnh) と称す。先天の最初の構築は、各仙壇 (đàn Tiên) を変えて聖浄 (Thánh tịnh) としたものである。

先天機道 (Cơ Đạo Tiên Thiên) は、多くの家壇を集合したもので、1928年までに、10以上のグループを数えた。すなわち、先天支道 (Chi Đạo Tiên Thiên) は自発的にできたのではなく、前から最初に集合した多くの基礎と最初に領導した多くの人物とを準備してなったものである。

グウエン・ティ・トゥ (Nguyễn Thị Tứ) 婆がミン・スウ (明師 Minh Sư) に遵って修行した後、老婆は自らと近隣の地域の各道友 (đạo hữu) の縁を助けるために道德蓬盧 (Lư Bồng Đạo Đức) を立て、童子の手による扶鸞基盤を創った。

ファン・ヴァン・トン, グウエン・フウ・チンとレエ・キム・ティの三位は、先天支道を形成する初期において「共同戦線 (công trận)」を組んで指導に当たった。先天支道の起源はそれ以前からあった。正式な先天は聖会の形成から開始された。

1927年丁卯の年の初め、至尊が七十二浄を立てる命令を發せられ、多数の「家壇」を順番に改変して聖浄となし、1928年に至り先天機道は招聖大会 (Đại Hội Chiêu Thánh) を開き、七聖 (Thất Thánh) の指導する集団によって最初の中央教権 (giáo quyền trung ương) が成立した。この七聖には、聖令 (Thánh lệnh) を得る各地から先天を修め学ぶグループの指導者を含んでいた。七聖の名は、

1. ファン・ヴァン・トン (Phan Văn Tông)
2. グウエン・フウ・チン (Nguyễn Hữu Chính)

3. グウエン・テェ・ヒイエ (Nguyễn Thế Hiến)

4. レエ・キム・ティ (Lê Kim Ty)

5. チャン・ロイ (Trần Lợi)

6. グウエン・ブウ・タイ (Nguyễn Bửu Tài)

7. グウエン・タン・ホアイ (Nguyễn Tấn Hoài)

七聖は最初の中核的人事要素であり、そこから先天聖会 (Hội Thánh Tiên Thiên) が形成された。1932~1933年までの段階で、諸々の方々が次第に集まってきていた。次いで「七賢 (Thất Hiền)」が任命された。

1. レエ・タイン・タン (Lê Thành Thân)

2. グウエン・フウ・トゥ (Nguyễn Phú Thứ)

3. ラム・クワン・ティ (Lâm Quang Ty)

4. ドアン・ヴァン・チュウ (Đoàn Văn Chiêu)

5. ファン・ルウオン・ヒイエ (Phan Lương Hiến)

6. チュオン・ニユウ・マウ (Trương Như Mậu)

7. ファン・バァ・フォック (Phan Bá Phước)」

先天の最初の聖座である天台浄 (道德蓬盧) は、もともとはミイ・トォ, カイ・ライ, ミイ・フウオック・タイ社ラン・ピイエン邑におけるグウエン・ティ・トゥ婆の私宅であり、恩上が先天支道の聖座とし、1934年末には、天台の九重台と協天台の座を作り上げた。その上で、1933年末から1934年初めまでに、先天聖会は正式に世間の目の前に出、1936年に至って、72聖浄が成立し得た。1937年に至るまで、先天聖会は (ベン・チェ (Bến Tre) テイエ (Tiên Thủy) に) チャウ・ミン壇 (Chau Minh Đàn) を選び聖座とし、土地を買いまし、今日のような広大なチャウ・ミン聖座の建設と発展をなした。

1938年 (聖座と72浄の建設のように) 聖会にとっての物質的基礎が安定した後、至尊は七聖の諸位を高位の職色の品に封じ、先天聖会を指導させた。

以上が、先天カオダイの創設過程の概要である。現在、先天聖会には52,859名の信徒と、南方の15の省城に礼拝活動の122の基礎がある。

信徒数に現在1,912名の聖会の職色が含まれている。

表2より、先天カオダイの72聖浄の分布を見ると、メコン川前江沿岸都市、もしくはその以北のミー・トオ、中州のベン・チェ、ヴィン・ロン、タン・アンなどに集中しており、明郷社の分布に近似している点も興味深い。

また、先天派の高僧が東遊運動を支持していたことや、1950年代の4支派への分裂については、現在、キエン・ザン省 (tỉnh Kiên Giang) チャウ・タイン (Châu Thành) に本部を置く真理白衣連団聖会が先天カオダイ派からの分派であることも興味深い。

<注>

Email: s_takatsu@seisa.ac.jp

- (1) 高津茂 (2010) 「チャン・ダオ・クワン (Trần Đạo Quang) とカオ・ダイ・ミン・チョン・ダオ (Cao Đài Minh Chon Đạo) の形成過程」『(東洋大学) アジア文化研究所研究年報』2010年, 第45号, 2011年2月28日発行, pp.100~116
高津茂 (2011-1) 「グウエン・ゴック・トゥオン (Nguyễn Ngọc Tương) とカオダイ・バン・チン・ダオ (Ban Chinh Đạo Cao Đài) の成立をめぐって」『(東洋大学) アジア文化研究所研究年報』2011年, 第46号, 2012年2月29日発行, pp.136~151
高津茂 (2011-2) 「二つの抗戦期に見るカオダイ教タイ・ニン聖座派と愛国諸派の民族的共生への動きの対比」『共生科学』第2巻, 2011年, pp.109~122
高津茂 (2012) 「カオダイ教伝教聖会の歴史と共生実践」『共生科学』第3巻, 2012年, pp.75~82
- (2) Huệ Khải : ‘Ngô Văn Chiêu Người Môn Đệ Cao Đài Đầu Tiên’, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2008, p.19
- (3) 高津茂 (2010), p.101
- (4) Huệ Khải : ‘Đất Nam Kỳ Tiền Đệ Văn Hoá Mở Đạo Cao Đài’, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2008, や Huệ Khải : ‘Tam Giáo Việt Nam Tiền Đệ Tư Tưởng Mở Đạo Cao Đài’, Nhà Xuất Bản Tôn

Giáo, Hà Nội, 2008, 参照

- (5) 武内房司編著 (2011) 『越境する近代東アジアの民衆宗教 中国・台湾・香港・ベトナム, そして日本』, 游子安「二〇世紀, 先天道の広東・香港からベトナムへの伝播と変容」2011年11月25日, 明石書店, 東京, 73頁
- (6) 石井米雄・桜井由躬雄編『東南アジア史 I 大陸部 (新版 世界各国史 5)』山川出版社, 1999年12月, 東京, 206~208頁
- (7) Huệ Khải : ‘Đất Nam Kỳ Tiền Đệ Văn Hoá Mở Đạo Cao Đài’, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2008, p.21
- (8) 武内房司編著 (2011), pp.49-50
- (9) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Toà Thánh Tây Ninh : CAO ĐÀI TỬ ĐIỂN, Soạn giả : Hiền Tài Nguyễn Văn Hồng 「Tiên Thiên」
<http://caodaism.org/CaoDaiTuDien/cdtd.htm>
- (10) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) : Lịch Sử Đạo Cao Đài Quyển II TRUYỀN ĐẠO Từ Khai Minh Đến Chia Chi Phái (1926-1938) , Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, In Lần Thứ 1, 2008, pp.533-578 Phái Đạo:Cao Đài Tiên Thiên
- (11) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Toà Thánh Tây Ninh : CAO ĐÀI TỬ ĐIỂN, Soạn giả : Hiền Tài Nguyễn Văn Hồng 「On Trên」
<http://caodaism.org/CaoDaiTuDien/cdtd.htm>
- (12) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.536~537
- (13) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.538~539
- (14) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.542 (239)
- (15) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.542 (240)
- (16) フウ・トオ (Phù Thờ) は、グウエン・フウイン・タン (Nguyễn Huỳnh Tân) という名の第五番目の孫によって1927年に、前君 (Tiền Quân) グウエン・フウイン・ドゥック (1748-1819) を祀った場所である。1959年に至り、拜殿はその近くの家地の土地に移され、地方政権は、広々

- として気持ちの良い拝殿を建設した。昔のフー・トオには、72の聖浄のうちの一つの聖浄があった。表1参照
- (17) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.548 (248)『先天カオダイ歴史事件』信史委員会 30頁参照
- (18) 先天聖会は、1960年から先天の歴史の記述に関する恩上の留意を得たが、多くの障害によって、1997年4月14日まで留まることなく、先天カオダイ信史集団が新たに聖会を成立させた。この時点で、先天の証人と歴史資料はほとんどなく、(先に言及したように) そのほとんどは何人かの高齢者の記憶を経て記されたことだけであった。それゆえ、検証のためにも一層多くの資料を探し集めねばならないとしている。
Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.551 (252)
- (19) 『大道三期普度先天カオダイ教略史要綱 (Đề cương lược sử Đạo Cao Đài Tiên Thiên Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ)』草稿版、2001年印刷、25頁 Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.551 (253)
- (20) 『先天カオダイ歴史事件』27頁と、付録に当てられている「七聖諸位の小史」の631頁～646頁を参照。Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.554 (255)
- (21) タン・ロン (タイプ打ちの) 回想記 70頁 ルウオン・ヴィン・トゥアット (Lương Vĩnh Thuật) (ルウオン・タム・サック (Lương Tam Sách)) 翁はダイ・タイン聖浄 (Thánh tịnh Đại Thanh) で1934年癸酉の年12月1日にタン・ロン (Thanh Long) の道号を授けられた。上述した事件で一緒だった一人の童子であり、翁は何度も各壇に参加したことが考慮されたようである。
Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.558 (258)
- (22) 先天カオダイ聖会信史委員会『先天カオダイ教略史要綱』, 2001, p.74 Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.558 (259)
- (23) (先天カオダイ二代教宗であった) 天法のグエン・ブウ・タイ師が『無極宮西宗小史』を記した。師の聖浄は、出家が決定した後で建てられた。Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.560 (260)
- (24) 頭師タイ・ニイ・ティン (Đầu Sư Thái Nhi Tinh) 大兄ははっきりと次のように覚えていた。天台聖座の旗を吊るす柱の高さは36mあり、戦争は聖座の痕跡をほとんど全て壊してしまい、現在はただ爆弾の着弾痕の隣に、若干の柱の基礎が散らばっているのみである。この後天台聖浄 (Thánh Tịnh Thiên Thai) が新たに建設された。所謂ヴォ・ヴィ (無為) 聖座 (Toà Thánh Vô Vi) で、旧基礎から約3km離れたミイ・フウオック・タイ社 (xã Mỹ Phước Tây) にあった。Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.561 (261)
- (25) (バック・リイエウの) ハック・ロン・モン聖浄で、恩上によって降された『明教聖伝 (Minh Giáo Thánh Truyền)』経の中でこの聖なる教えは1936年 (丙子の年) 印刷されている。Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.562 (262)
- (26) 『先天カオダイ聖教蒐集 (Thánh giáo Suu tập Cao Đài Tiên Thiên)』の中に印刷されているアン・タイン・ミン・クン (安聖明宮, An Thánh Minh Cung) における1940年庚辰の年4月24日の壇の中で、協天台帝 (Đức Hiệp Thiên Đại Đế) が諭された。Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.565 (263)
- (27) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo (2008) :pp.567 (264)

(客員研究員・星槎大学共生科学部教授)

表1 72聖浄(Thánh Tịnh)

	聖 浄 名	所 在 地		
1	ティエン・タイ	Thiên Thai	ミイ・トオ	Mỹ Tho
2	ボン・ライ	Bồng Lai	トゥ・ザウ・モット	Thủ Dầu Một
3	クウ・クック・トア	Cửu Khúc Toà	ヴイン・ロン	Vĩnh Long
4	クウ・リン・モン	Cửu Linh Môn	ミイ・トオ	Mỹ Tho
5	ゴック・ソン・クウアン	Ngọc Sơn Quang	ヴイン・ロン	Vĩnh Long
6	バック・ロン・クン・ホアン	Bạch Long Cung Hoàng	ベン・チェ	Bến Tre
7	チャウ・ミン・ダン	Châu Minh Đan	ベン・チェ	Bến Tre
8	バック・ダイ・クン	Bắc Đẩu Cung	チャウ・ドック	Châu Đốc
9	アン・ティエン	An Thiên	ヴイン・ロン	Vĩnh Long
10	ダイ・ティエン	Đại Thanh	ザ・ディン	Gia Định
11	クイ・ティエン	Quy Thiện	タイ・ニン	Tây Ninh
12	ロン・ドゥック・ティエン・モン	Long Đức Thiên Môn	ゴォ・コン	Gò Công
13	ロン・ホアン・アム・トゥ	Long Hoàng Am Tự	ヴイン・ロン	Vĩnh Long
14	ヒエン・ティエン・ヴォ	Hiền Thiện Võ	ミイ・トオ	Mỹ Tho
15	ドン・クウアン・ティン・ティエン・ティエン	Đồng Quang Tịnh Tiên Thiên Thiên	ビエン・ホア	Biên Hoà
16	クウ・フエ・ダイ	Cửu Huệ Đài	ベン・チェ	Bến Tre
17	ボン・ハイ・ダオ	Bồng Hải Đảo	バ・リア	Bà Rịa
18	ズィエウ・チ・クン	Diêu Trì Cung	ベン・チェ	Bến Tre
19	フウイン・ロン・クン・ディエン	Huỳnh Long Cung Điện	ベン・チェ	Bến Tre
20	フ・ヴォ・カイン	Hư Vô Cảnh	ラック・ジャ	Rạch Giá
21	ロン・アム・クン	Long Am Cung	タン・アン	Tân An
22	ルック・ズィエン・ドォ・トォ	Lục Diện Đồ Thơ	ミイ・トオ	Mỹ Tho
23	ゴック・タイン・クウアン	Ngọc Thanh Quang	タン・アン	Tân An
24	ゴック・フ・クウン	Ngọc Hư Cung	タン・アン	Tân An
25	ヴォ・カ・チャン	Võ Ca Tràng	タン・アン	Tân An
26	グウ・ハイン・トア	Ngũ Hành Toà	バック・リエウ	Bạc Liêu
27	グウ・ダイ・ヴォ・スイ	Ngũ Đài Võ Sĩ	ミイ・トオ	Mỹ Tho
28	タイン・ソン・ホア	Thanh Sơn Hóa	ミイ・トオ	Mỹ Tho
29	タット・リン・ダイ	Thất Linh Đài	ベン・チェ	Bến Tre
30	ゴック・フウインロン・ホン	Ngọc Huỳnh Long Hồn	ザ・ディン	Gia Định
31	ハック・ロン・モン	Hắc Long Môn	バック・リエウ	Bạc Liêu
32	ゴック・ミン・ダイ	Ngọc Minh Đài	ザ・ディン	Gia Định
33	フウイン・ダイ・カイン	Huỳnh Đài Cảnh	ソク・チャン	Sóc Trăng
34	バット・ブウ・チャウ・リン	Bát Bửu Châu Linh	ベン・チェ	Bến Tre
35	アン・ヴォ・ダイ・ヴォ	An Vô Đài Võ	ミイ・トオ	Mỹ Tho
36	ティン・クウアン・ダウ	Tịnh Quang Đẩu	ラック・ジャ	Rạch Giá
37	タイン・リエン・ダン	Thanh Liên Đan	チャ・ヴイン	Trà Vinh
38	タイン・フエ・ロン	Thanh Huệ Long	ゴォ・コン	Gò Công
39	トゥ・ロン・チャウ	Tứ Long Châu	ミイ・トオ	Mỹ Tho
40	タム・キィ・ホア	Tam Kỳ Hoa	カン・トォ	Cần Thơ
41	クウアン・ミン・ダイ	Quang Minh Đài	カン・トォ	Cần Thơ
42	ゴック・クウ・クン	Ngọc Cửu Cung	ソク・チャン	Sóc Trăng
43	ゴック・ヌウ・ダイ	Ngọc Nữ Đài	カン・トォ	Cần Thơ
44	ゴック・フエ・クウアン	Ngọc Huệ Quang	ベン・チェ	Bến Tre

カオダイ・ティエン・ティエン（先天 Tiên Thiên）派の創設過程

45	キム・タイン・ロン	Kim Thành Long	ミイ・トオ	Mỹ Tho
46	ダイ・ゴック・ホア	Đài Ngọc Hoa	ヴィン・ロン	Vĩnh Long
47	ダイ・クワン・カイン	Đài Quang Cảnh	カン・トオ	Cần Thơ
48	バット・ブウ・ディエン	Bát Bửu Điện	ザ・ディン	Gia Định
49	バット・カイン・クン	Bát Cảnh Cung	チャ・ヴィン	Trà Vinh
50	ゴック・フウオン・ダイ	Ngọc Hương Đài	チャ・ヴィン	Trà Vinh
51	アン・ラク・フウイン・ミ	An Lạc Huỳnh Mi	ミイ・トオ	Mỹ Tho
52	タイン・クン・バック・ホオ	Thanh Cung Bạch Hồ	ベン・チュエ	Bến Tre
53	タイ・トン・ヴォ・クック・クン	Tây Tông Vô Cực Cung	ベン・チュエ	Bến Tre
54	タイ・クン・ハック・ホ	Tây Cung Hắc Hồ	ベン・チュエ	Bến Tre
55	チュン・ティエン	Trung Thiên	カン・トオ	Cần Thơ
56	チュオク・マイ	Trước Mai	カン・トオ	Cần Thơ
57	チャン・ドアン	Trần Đoàn	ソク・チャン	Sóc Trăng
58	ゴック・ディエン・フウイン・ハ	Ngọc Điện Huỳnh Hà	ザ・ディン	Gia Định
59	タム・ホア・リン	Tam Hoà Linh	カン・トオ	Cần Thơ
60	フウ・トオ	Phù Thờ	タン・アン	Tân An
61	ゴック・チエウ・ロン・クワン	Ngọc Chiêu Long Quang	トゥ・ザウ・モット	Thủ Dầu Một
62	シック・ロン・ミン・ドゥック	Xích Long Minh Đức	ソク・チャン	Sóc Trăng
63	キム・クワン	Kim Quang	ミイ・トオ	Mỹ Tho
64	ハ・ロン・ディエン	Hà Long Điện	ミイ・トオ	Mỹ Tho
65	タップ・グウ・ダイ・クワン	Thập Ngũ Đài Quang	ベン・チュエ	Bến Tre
66	ニャン・サウ・ヴァン	Nhạn Sầu Vãng	トゥ・ザウ・モット	Thủ Dầu Một
67	アン・ティエン	An Tiên	ヴィン・ロン	Vĩnh Long
68	リン・モン・クワン	Linh Môn Quan	ラック・ジャ	Rạch Giá
69	ロン・アン・フウオック・ティエン	Long An Phước Thiện	ミイ・トオ	Mỹ Tho
70	ザ・クワン・ミン	Dạ Quang Minh	ミイ・トオ	Mỹ Tho
71	ドン・クン・バック・ロン	Đông Cung Bạch Long	ベン・チュエ	Bến Tre
72	ホア・アン・フォ・ホア	Hoà An Phổ Hoá	ミイ・トオ	Mỹ Tho

表2 72聖浄省別分布

ミイ・トオ	15ヶ所
ベン・チュエ	13ヶ所
カン・トオ	7ヶ所
ヴィン・ロン	6ヶ所
タン・アン	5ヶ所
ザ・ディン	5ヶ所
ソク・チャン	4ヶ所
トゥ・ザウ・モット	3ヶ所
チャ・ヴィン	3ヶ所
ラック・ジャ	3ヶ所
バック・リエウ	2ヶ所
ゴォ・コン	2ヶ所
チャウ・ドック	1ヶ所
タイ・ニン	1ヶ所
ビエン・ホア	1ヶ所
バ・リア	1ヶ所
小 計	72ヶ所



先天カオダイ聖会事務局常任委員会前にて

Địa, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2007, pp283-284
参照)



先天カオダイ聖会「瑤池寶殿」内陣
在ベン・チェ省チャウ・タイン県ティエン・
トゥイ (筆者 撮影)



先天派カオダイ聖会事務局には多くの顕彰状や感謝状が掲げられている。その内の1枚で、ヴェトナム祖国戦線ベン・チェ省委員会より贈られたものである。(筆者撮影)

先天カオダイには、英雄的ヴェトナムの女性と母は48名。374名の職色と338名の信徒と217の家庭が抗戦に参加した。民族解放の実現のために犠牲を顧みることなく積極的に戦った。

(Phạm Bích Hợp: ‘Người Nam Bộ và Tôn Giáo Bàn